

一〇一 世界と人間の生について 老園丁の未完の廻心 第三章（断章）

Letter No3

莊周さん、第二章で、いろいろ考えを巡らせたはずなのに、最後には振り出しに戻っていることに気づきました。それはうかつなわたしに一つの廻心であったかのような錯覚をもたらしかねませんが、おしまいの方でなにも本質的なことをつかんでいないと悟って急転してしまいました。結果を見れば粗い思索だったのです。心を廻らせてみようと思つて始めたわたしの企てはたやすくはないのです。それは、初めからわかつていたことですね。これまで多くの善知識と呼ぶべき賢人たちが一生かけて考えたことを、未熟な者がどれだけつかむことができるか幻想を抱いてはいけません。わずかでも知りえたらもって瞑すべしと考えるければいけないでしょう。それでも、歳をとった今考える時間を得ていることを感謝しなければいけないと思っています。莊周さん、今しばらく、悠々と考えるあなたのように思索できることを喜びとしながら、模索していききたいと思っています。

第三章 世界と生をどうとらえ、どう生きるか、模索

F わたしが進もうとしている考え方

第二章でたどりついたのは、人間は、自然界を律している法則がなぜそうなのかを知ることとはできない、そして、世界についての究極の答えに限らず、具体的な自然の運行の多くについて詳細を理解し尽くすことができないし、これからどのようなことが起きるかを予測することも困難である、という判断でした。この世界には人間と人間の社会も含まれています。人間と人間社会がどのように動いているか十分理解することができず、これからのようになっていくかを予測することもできません。こちらはだれもが知っていることです。つまるところわたしは、世界と人間のことを不十分にしか知らず、どのように行動するのが一番よいか判らずに存在しているということです。

それでも人間は、生きていくように生まれてくるのです。しかも、人間にとつての最大の関心事であるこの生について、なぜ生命が存在するかというような問いは、前段で知ったように、人間の認識能力を超えたものです。生命の秘密をあこれ思索することは人間に避けられないことだとしても、人間の条件を超えてそれを言葉で言いとれば「神秘的」

にならざるをえません。そうすることは人間がよく生きる道ではないだろうとわたしは考えます。いえ、わたしの考えではなく、ゴータマ・シッダールタのとった態度がそうだと理解しているのです。“神秘”に踏みこまないとすれば、わたしのこの思索はある枠よりも外に出ないことになりますが、それを受け入れることに反対する人があっても仕方ありません。今のわたしは、この立場から自分の人生を考えようと思います。

こうしてこの章では、生きている人間の方からもう一度世界と人間の生を観なおすことが課題となります。世界内存在である人間として世界と人間を考えるのは、実存主義の立場に通じるでしょうか。でも、わたしはヨーロッパの実存主義的な考え方に親しんでいるとは言えないでしょう。自分がまだそうでないけれどもより優れた者になる可能性を追究することは、人のほめるべき性質です。東洋の禅にも「向上一路」という言葉があります。でも、抽象的にそのことだけを考えて言いたるだけでは向上できないだろうと思います。何か具体的な行動を企てて身を投じながら考えるのでなければ道は開けません。それに、禅の「向上一路」には「千聖不伝」という言葉がついています。どんな企てをすればよいかは誰も教えてはくれないのです。おそらく成功しないかもしれないことを行ない、その成り行きから学びながらまた試みをするこゝしかわたしにはできません。ですか

ら、「千聖不伝」を、「道はわたしたち一人ひとりが自ら歩まねばならない」というゴータマの言葉に結びつけて考えることにします。

どんなことを試みるとしても、世界と人間のことを不十分にしか知らず、どのように行動するのが一番よいかたしかには知らないというのが、わたしという存在を規定している条件です。そこでわたしはどうすればよいか、それがわたしの尋ねていることです。広くさまざまな考え方の現代の哲学者たちから学ぼうとすることはできても、彼らと同じレベルで議論することはわたしの力を超えていますし、莊周さんもほかの賢者たちも教えてくれないとすれば、自分なりに考えてみるしかありません。身の丈に合った考察をすることにしましょう。

ざっとしかできませんでしたが、第一章でわたしなりにまとめてみたところからすると、昔から哲学者たちは、自分をどう律すればよいか、どのように自分を励ますかを考えてきたのだ、と理解できます。ヨーロッパの人を挙げれば、ソクラテス・プラトン・アリストテレスも、エピクロス派やストア派の哲学者も、それ以後の哲学者・思索者もみな一人ひとりが自らの歩みのなかで考えたことを説いてきたのだと分かります。もちろん、孔丘や莊周さんあなたや朱熹ほかの中国の思想家、そしてわたしのあまり知らない国々の思索家

も、ヨーロッパの哲学者たちに遅れをとったとするのは言い過ぎでしょう。

けれども仮説的にゴータマ・シッダールタを先駆者とし、イマヌエル・カントを近代の後継者にとらえて、人間にできる認識を超越しない立場をわたしはとうとうとしているのです。そして、その立場は第二章でまとまった考えにしようとなつた科学的な立場につながるものだ、と考えようとしているのです。そうすることは、道を狭めることになるのかもしれませんが。神秘にも踏みこまないといいましたから、わたしは困難な道を進もうとしているのです。

世界と人生は、あらゆることが起こりえる峻厳で無情で非情で残酷で……それでいて驚きに満ち豊かで美しく安らぎもある……不可思議な場です。そこで生きるのに今わたしがとうとうとしている方針では足りないのかもしれませんが。序に記したように、この第三章では、出発点を限定せず広がりのある立場から考え始めるつもりでした。でも、考えをまとめながら進んできて、結局、おおよそ肚づもりとしてあつたことを揺るがすほどの思想にはたどりつけない、と思ひ至りました。今は、回り道をしないで、現在たどりついている考えを精査しながら記すことにします。

それでも、これまで先人たちが考えてきたことをふりかえりながら、可能な考え方をとり入れる努力をしましょう。そうしなければこの思索の意味がなくなるでしょう。

G 迷いの中から歩み出す

この思索の始まりは身心不全に陥ったことをきっかけとしています。予期せぬことに遭いうろたえて、おちついて考えて事態を打開する行動へ踏み出すことができませんでした、動揺しながらでも人は歩み出さなければならぬのに。今は身心も少しおちついてきて、なにがしかの活動をするようになっていきます。歩み始めてみましょう……。と言いながら、どう書き進めればよいか試行錯誤しているうちに、思考はまた堂々巡りをしていることに気づきます。それではいけません。やり直します。思い切って問題の核心に飛び込みましょう。結局のところ、わたしが安心立命からほど遠く根本的に動揺極まりない状態にあることが問題なのです。

漢字を用いる「安心立命」という言葉は、漢字の「命」という語彙を一方の核としてできた言葉で、中国や日本の古来の思想がまといっています。仏教的な思想もしみこんでいます。そこから議論をしたら、人それぞれに受けとり方が異なり紛糾するかもしれません。それに、インドや西アジアやヨーロッパの思想から見ると偏りがあるという人もい

るでしょう。また、言葉から始める議論が陥りがちな不十分さが出るかもしれません。それでも、凡人が自力で考え始めることのできるここから始めてみます。

「命」を「いのち」と読めば、生物のいのちやわたしのいのちのことです。「命」を音読みで「メイ」と読めば、最初に思い浮かぶのは「天命」でしょう。ここでは、天を神的なイメージを伴う天帝と考えないで、「天命」を抽象的な「天の命じること」と限定して理解したいと思います。すると、いのちは天命によって授かるものという意味が加わり、「命」がいのちにかかわるほど厳粛な「使命」だという意味にもなります。ですから、漢字「命」は、人がこの世界で授かった「いのち」を意味し、「生きなさいと命じられていゝる」ことをも意味することになります。「いのち」は「生」でもあるのです。他方で、人間はだれもがいつか死ぬことを知っています。ヨーロッパでは人間のことを「死すべき者」と言い、漢語の「寿命」は天からの授かりものを意味すると同時に「宿命」でもあつて、いつ死ぬかは当人の関与できない「天命」です。「いのち」つまり「生」には必然的に「死」が付随するのです。それを科学的に解釈する必要はありません。漢字表記を用いる言葉で話しながら経験をつんだ人間は、こういうふうに論を進めるまでもなく、以上のことを体得している、とわたしは思います。

さて、こういう人間が大自然を観察すれば、天地・海・山河……に生かされていると感じ、同時に自然の峻厳さをも知ることになります。その自然には人間とほかの生き物たちが存在します。そして生物は人間と同じように生きて死ぬことも知ります。こうして世界を見ているとき人間は、授かった人としての生に喜びや悲しみを身心に感じながら、前段で考えたようなことが頭をよぎっているのでしょう。言葉に表わせば、人間は自然と生と死を感じ考えながら生きています。ところが、人間は生きるようにこの世界に誕生する生物の一員ですが、どういうわけか、ほかの生き物よりも思考することができます。生きる活動に没頭しているときにはそうではないけれども、思考すれば、自分の死のことが頭に浮かぶのは避けられません。そして、その問題が人間を悩ますことになります。

こういう人間の生の条件から、人は人生が全面的に楽しいものだと言うことはできません。鋭敏な人はとまどい迷う人生に苦しみを感じるのです。単純すぎる解釈かもしれませんが、ゴータマ・シッダールタはそういう人だったのでしょうか。自他のその苦しみから脱却する道を追究することがかの人の課題でした。ゴータマは世界を見究めようとし、結局究め尽くせないという判断に到ったのだ、と思います。しかも、その判断は、世界の事物に堅固な実体的なものはないという判断につながっています。そして、そういう世界を受け入れるほかないと悟り、人々にそのことを説いた、と理解するのは単純すぎるでしょう。

か。そこには、「生きとし生けるものを大切にせよ、殺すなかれ」という願いなど崇高な思想がありますが、人間の社会で実践的に生きていく指針としては、仏教で説かれるところから推察すれば、だれもが行なうべき中庸なものを勧めたのだと思われます。しかし、ゴータマの道は生易しいものではありません。

そういう道が困難なことを知りつつ、ストア派の哲学者たちはちがった説き方をして、可能な実践を求めたように見えます。エピクロス派の哲学者は、苦しみを承知のうえで樂しみを求めることを勧めました。その底に原子論的な世界観があることも考えてみなければなりません。ソクラテスやプラトンなどの論説も、人間の条件のもとでどう生きるかという問いに直接答えているように見えないのは、性急に答えを求めるわたしの未熟のせいでしょうか。中国の賢人たちもわたしが求める「安心立命」に直接答えてくれないように思えます。

ところで最近、ウンベルト・エーコの『歴史が後ずさりするとき』を読んでいたら、知性の活躍が魅力のエッセイ集の終わりに、死が気になる年齢になったエーコが「死の短所と長所」という文を書き残しているのに出会いました。次のような箇所がありました。

哲学者は死ななければならないことが分かっているし、その死を待ちながら、自分の人生を活動的に送っているのだ。超自然的な生を信じる者は平静に死を待つ。しかしエピクロスの教えのように、死を迎えたとき死について心配することはない、なぜならそのときわれわれはもはやそこにいないから、と考える者も、同じように平静に死を待つことができるのだ。

エーコ一流の書き方のなかのこの文章をどの深さで理解すればよいのかとまどいますが、この文章のままに受けとれば、哲学者も、エピクロスのな快楽を求める者も、超自然的な生を信じる信仰者も、平静に死を待つことができる、と言っていることになります。そうだとすると、わたしが今たどらしく考えようとしていることを、快刀で断ち切っているのです。

他方で、「核心の問題は死の不可避性であり、哲学的な姿勢とは死への準備をすることなのだ」と言います。この言い方は、モンテーニユの「哲学するとはいかに死ぬかを学ぶこと」に対応するでしょう。ところが、「死への準備の様相は多種多様であり、私はその中のある一つの方法を好んでいる」と言って書きつけるのは、またエーコ流の癖玉です。そして、「その文章は、奥深い真実を表現しようとしたものだ」とことわっておいて、

死への準備の本質とは、「伝道者は言う、空の空、空の空、一切は空である」とい

う境地を徐々に得ることなのだ。

と記します。ここまでの文章でエーコは、人が生き方の問題を真剣に考えているとすればそれを信じて死に臨むとき揺らぐことがない、とする見方に立って話しています。でも、それで済むなら、死に臨んでもいなかったわたしは悩むことがなかったでしょう。

次の段落は「だが」という言葉で（そのカッコに「私の論題の前半部に入るが」という注意書きを添えて）始まり、「こういったことにもかかわらず、哲学者も死がもっている苦しい不都合について認識している」と書きます。しかし、このあとの「論」は、わたしの問題意識とずれていきます。エーコにとって重要なのは、「誕生し成熟していく素晴らしさとは、人生は知の見事な積み重ねであるということに気づくことにある」のです。だから、「……（その貴重な）経験が失われてしまうことを考えると、苦悩と恐れを感じ、……この悲しさに対してわれわれは活動することで対抗する（けれども）、……これこそが死の真の不都合であって、哲学者さえもこれについて悲しみを感じる」と書きつづつていきます。

知性の人がその短い文で考察したのはそういうことでした。その文章もわたしが尋ねていることに応えてくれません。

滞りがちなわたしの思索に「喝」を入れて前進させるためにエーコの思索を挿入しましたが、やはり、はかばかしい答えは得られませんでした。先ほど中途半端になっていたところにもどり、誤りを怖れずに言葉を足していきましよう。結局、古来の賢人や哲学者や思想家も、どのようにしたら「安心立命」が得られるかを人に説くことの困難さを知っていたからそれを語ることを控えた、と考えざるをえません。だから、ゴータマも「道はわたしたち一人ひとりが自ら歩まねばならないのである」としか言わなかったのでしょうか。ゴータマ・シッダールタの考え方を記した原始仏典にも、その秘訣は語られていない、とわたしは考えます。

エーコが死に対する安心立命の態度のかなたに掲げた「伝道の書」の言葉について、堀田善衛がエッセイ『天上大風』で、この「空」を「そら」や「から」と読む人がいると聞いて衝撃を受けたと書いています。その思想について言えば、『旧約聖書』に附属する「伝道の書」はユダヤの神とは異質な思想を説いているように思えます。この「空」の思想は字面からナーガルジュナの「空」を想起させて、ゴータマの思想に通じるように感じさせます。ここは重要な点だと思いますから考えてみましょう。

ゴータマが説いたのは、自分で経験をつんで世界を見究めなさい、ということだったとわたしは理解します。仏典ではゴータマの思想は漢語への翻訳で「色即是空」や「諸行無常」と表現されていますが、これを現代の科学の知識へ短絡するのは控えるのがよいと思います。重要なそれらの漢語を深く考察し、さらに、現代の科学や学問が明らかにしつつあることを学び受けとめることが肝要だ、とわたしは考えます。くりかえしになりますが、そのとき、ゴータマが答えなかった問いやカントが戒めたことについては、認識や科学の場を超越した次元の話として彼岸に置くようにしたい、と考えます。先ほど出た「空」もエーコのように彼岸に掲げておいて、「自分の人生を活動的に送る」ようにし、かつ思索するのがよいと考えます。肝要なのは、さまざまところで説かれているように「今を生きること」なのでしょう。もともと、ただそう言っているだけでは空念仏になると思います。この言葉は、ふたたびどのように生きるかという深刻な問いを提起している、と考えなければいけません。

このように考えた上で、最初の方で言った「ゴータマを先駆者とし、カントを近代の後継者と考え、人間にできる認識を超越しない科学の立場に立って歩む」ことを再確認することにしましょう。

H 世界の法に身をゆだねる

エーコの思索では、平静に生きるのに最も深刻な不安を引き起こす「死」に焦点が当てられていました。ところが、わたしが動揺したのは、わたしの未熟をよく教えてくれますが、直接死にかかわらない程度の場面でした。「安心立命」はそういう場合も含む広い言葉だと思えます。さつきは「命」という語の意味をおおよそおさえましたから、さらに続けて「安心立命」という言葉全体の意味を考えましょう。辞書は、その意味を「人力を尽くしてその身を天命に任せ、どんな場合にも動じないこと」とします。儒学で「安身」と書いていたのを達磨が「安心（あんじん）」と書き換えて仏教思想にとりこんだ、と書く辞書もあります。いずれにせよ、言葉の意味は分かりやすく、わたしはまさにその境地に至ることを願ったのでした。

原始仏典から推測すると、ゴータマの修道は単純に「安心立命」を求めただけではないと考えられます。それでも、人生の「苦しみ」から脱出して解脱した先には「安心立命」の境地がある、と考えることができます。その境地が解脱を成就したところにあるのだとすれば、「安心立命」の境地に至る方法は簡単なものではなく、「道はわたしたち一人ひ

とりが自ら歩まねばならないのである」というゴータマの説法にふたたび回帰する、というのが今のわたしの解釈です。また、振り出しにもどりました。

考えてみれば、ありがたいことに人間は気楽にできていて、目にする出来事が好奇心を引き起こしてたいいていそれに注意を払って生活しています。まあそうやって生きていくことができるのです。しかし、あれこれのことをしているなかで、起こる出来事に満足しているわけではありません。それでも人は、それをやり過ごすことができるようにできているのでもあります。けれども、何かをきっかけに精神が落ちこんで不安に陥ることはだれにでも起きますでしょう。人の認識能力はなにかに意欲を抱かせるようにもしますが、そのとき認識能力の不足を思わざるをえません。おおよそ自信をもって当面する事態に取り組むことはめったにできません。そのとき、それをどう克服すればよいか分からないので、「安心立命」したいのだけれども凡人は立ち往生するのです。その困難は日常生活にまぎれるとしても、死に直面する場合には、「安心立命」の境地に近づいているかどうかをためられてあらわになるでしょう。

ほかの生き物がどう感じて生と死を生きているのかほんとうは分からないのですが、その死を観察すれば、平静とは見えないけれども潔いように見えます。それに引き換え自分

をふりかえれば、動揺していることを自覚します。それを克服することの困難を味わうことになります……。わたしには、エピクロスのな安楽（それは「安心」でしょうか）を求めるだけでは、この立ち往生を克服できるように思えません。

そういうわけで、昔から多くの人が超自然的あるいは神的なものにすがることになったのだ、と思います。わたしが宣言した立場からすれば、仏教のいう「安心」も、手元に引き寄せて獲得しようとするときにはそういう態度だということになるでしょう。しかし、信仰が純化された「信」に近づいたときの力をわたしも簡単に退けることはできません。理想的に「信」に篤い人の話を聞くと、その人がほとんど安心立命し身をゆだねて人生を楽しんでいるように思えます。キリスト教徒でもイスラム教徒でもそういう人のことが語られているのでしょう。中国や日本でも、特に浄土教の信者についての妙好人という言葉で、そういう話を漏れ聞きます。そういう篤信の人は、宗教を学び修行をした僧たといえば禅の修行によって大悟した出家者だけでなく、在俗の信者にもあったということです。人が安心立命に近づくということはあるのでしょうか。そう考えることは、わたしのよう迷っている凡夫に生きていく希望を与えてくれます。

けれども、今書きつけたことは、そういう篤信の人のことをよく知って考えた上でのこ

とはありません。いまのわたしはそれをほんとうに自分のこととして納得して語ることができません。また、その道へ進もうとは思いません。

なぜなら、わたしはすでに自分の進む道を選んで、すなわち、「ゴータマを先駆者とし、カントを近代の後継者と考え、人間にできる認識を超越しない科学の立場に立って歩む」と宣言したのですから。この道は努力して真理に到達し、そこから生きていくというような道ではありません。そういう真理を究めることはできないだろうと覚悟して生きていく道です。この道は、わたしの外から「安心」を与えてくれる支えがない道です。しっかりとした安心がまだ得られず天命にゆだねる本当の覚悟もまだないままで歩むことになります。

ここまでの思索で一つだけ判ったのは、「安心立命」は生き方の問題だということですが、死が間近になったときでもそのように考えるほかに、わたしにできることはないでしょう。生き方を模索し続けるのですから、理想的な「安心立命」に到達した上で歩むという考えをあきらめることになります。動揺しないということはありえないでしょう。むしろ大いに動揺するでしょう。それでも、そういう道を歩むという決心をしたのです。

急に中断して表白　老園丁が到着した現在地

「序」に書いたように最初の心づもりでは、自分なりに整った形で思索を進めるつもりでした。第四章は「可能な安心立命の仕方」、第五章は「老園丁が到着した現在地」と仮題まで決めていました。しかし、そのやり方が困難なことが判ったのです。この世界にとどまって世界を観察しながら生きるという立場では、——世界と人間のことを人間が必要と思うほど知ることができず、なにより、これから何が起こるかも知ることができず、どう行為すればよいか迷いなく決めることができないのですから——、求めているたしかに「安心」を得ることは困難なことだと知ったのです。

粗く言えば、人間の生においてどう生きるかという問題は、第二章で網を張ってみた問題空間とそこでの概念で議論を究めることはできない、わたしの能力を超えた次元の課題と判断せざるをえません。目につく現代の書物にそういう区分けをしようする考え方は少ないように思えます。でもそれでは、議論が錯綜してわたしの頭にかかる霧を晴らしてくれるとは思えません。ほとんどの人が立ち往生しているのでしょうか……。

急なことですが、思い迷うことを中止して、第五章に用意していた表題で暫定的なまと

めをすることにします。これは、とりあえずの表白で、今後もう少しまな考えができたら続きを書くことにしましょう。しかしそれが仮にできたとしても、問題の困難さからして、ワイトゲンシュタインが後半生にした考察からもほど遠く、ああでもないこうでもないといと繰り言を書きつけることしかできないでしょう。

そのときには、莊周さん、『莊子』を手にとることがあるかもしれませんが。進歩のなさに閉口されるでしょうが、ぼんやりしたわたしの神経回路にまた出てきてお相手をしてください。

わたしの立場では、頼ることのできる何かがこの世界の背後にあつてそれに頼ることができると思えることはできません。しかし、この世界で起きていること（それは超自然的なことではないでしょう）が全部説明できないからといって、意味もないでたらめだと考えることもできません。ですから、わたしが体調不良で苦しんでいたとき口を突いて出てきた次のような感慨

天仰ぎ人をも容れる不可思議な世界の法を敬って在れ

天仰ぎわたしを生かす不可思議の世界の法にただ帰命せよ

なるようになると娘に諭される天の理法がこの身貫く

は、わたしの原則的な立場を離れてはいないと思います。廻心は堂々巡りして完了するとは思えませんが、もうしばらくこういう姿勢でやっていくことにします。

天地の慈しみをもうひとしづく授かりました。感謝しています。わたしはそれに値する者になると誓いました。力が足りませんが日々復唱して努め励みますと、誰に対するものでもない言葉をつぶやきながら。

二〇二二年、八月六日